

# 曹洞俳壇

選・村松五灰子

寝返りの右も左も熱帯夜

秋田県 小田嵩恭葉

評 暑く眠られぬ夜を上五、中七の語をもつて簡潔に表現したところが良い。

いかにも寝苦しそうでユーモラスさも含んでいる。

禁色を深めゆく雨杜若

山口県 御江やよひ

評 その昔律令制の「衣服令」で位によって着用する色が決まっていた。紫色は親王、高位の諸臣三位以上のみが許された禁色。その紫が雨に、いよいよ叙情は深まる。

◆ 瀬音まだ聞こえさうなる鮎もらふ 福島県 大槻 弘

◆ つくし摘む明日から馬の入る牧に 神奈川県 小田喜信博

◆ 田の神の石に脱ぎたる蛇の衣 山形県 工藤 竹治

◆ 打ち応へある稲架杭の新しき 三重県 西村 廣視

◆ 心地よき昼寝をはさみ過去未来 埼玉県 小林 茂之

◆ 大瑠璃の歌に熊野の石畳 新潟県 星野 三興

◆ 早苗饗や田へ開け放つ大広間 大阪府 柏原 才子

◆ わらび採り野辺の助六雲が見る 滋賀県 三田 和子

◆ 鯛を出してきしきし手を洗ふ 山口県 中井 清子

◆ つばくろや主人も家も流されて 岩手県 眞藤 英利

\* 選者吟

良く蟲の鳴きし旧居のことをふと

五灰子

\* 作句小見

「百の理論より一句」と桂信子は言っています。虚子は「客観写生」「花鳥諷詠」と。大自然に心を遊ばせるといこうとでしようか。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

真夜に鳴く鳥の声さえ入院の母がわれ呼ぶ

声かと思う

福島県 大槻 弘

評 もっと巧みにも詠えそうな作者だが、少したどたどしくそこに却って切実さを感じる一首である。重篤な母上かもしれないが、知らない場所に一人置いて来たことへの焦慮が滲む。母という存在の重さを感じる。

一列にマスクの顔が連なりて連風ののごとき

登校風景

鳥取県 山本 浩一

評 マスクをした人が街でも増えた。集団感染を恐れて登校時の子どもたちもそろってマスクをしている。「連風」という喩えが、視線を大空にいざない未来ある児らに相応しい。

◆魚持ちの鷺より長く佇みてわれも川辺の景色のひとつ

鳥根県 横山 豪吾

◆ゆくりなく溜池に鳴く牛蛙その低きにも疼く故郷

兵庫県 前田あつ子

◆水鏡出羽丘陵を映しいる広がる絶景 鷺の飛び立つ

秋田県 小松 紀子

◆夏帽子買ってにっこり療友の顔が涙でくもる今朝の計

静岡県 土屋 君江

◆パイプラインの蛇口ひねれば踊ること水は眩しく田面を走る

岩手県 六戸さとる

◆はつ夏の波止に降り立つ花嫁に鳥の人たち集まりてくる

福岡県 三吉 誠

◆軍服姿の君の遺影に語りかける平和な七十年を独り生きしと

鳥根県 雑賀 花子

◆啄木が詠ひし上野の停車場に托鉢の僧経読みて立つ

千葉県 富野光太郎

◆夏羽織タイトル戦は二日制挑戦の雄若武者に見ゆ

新潟県 大橋 恒次

◆愛をもて孤児育める神父より受けし「聖」の字 名のごとく生きむ

愛知県 宮地 聖造

## \*選者詠

矢継ぎ早にことば噴きだす日を待ちぬ入道

雲の立ち上がる夏

ちづ

## \*作歌小見

三吉さんの上句の「は」音の頭韻が、歌柄とマッチして爽やかです。歌を詠む時は内容も勿論ですがリズムを大切にしたいものです。拙歌は幼子なことばを獲得しつつ声に発する不思議、それをはらと待つ時間を詠いました。



# 大本山永平寺



道元禅師御真廟外観

## 八大人覚はちだいにんがく

九月二十九日は大本山永平寺御開山道元禅師さまのご命日です。永平寺では九月二十三日から二十九日までの一週間、御遺徳を偲び、報恩供養の御征忌を行います。

道元禅師さまは、『正伝の仏法』を広めるため、生涯をかけて九十五巻にもなる『正法眼蔵』という膨大な書物をお書きになりました。お亡くなりになる年の一月には、お釈迦さまの最後のお説法『遺教経』の中心となる「八大人覚」をお説きになりました。八大人覚とは《欲を少なく、足ることを知り、穏やかなることを願い求め、勤めはげみ、仏さまのみ教えをいつも忘れずに、坐禅を好み、智慧を磨いて、無駄な論争をしない》というみ教えです。

道元禅師さまは、「お釈迦さまの弟子は、皆この八大人覚を必ず学びたてまつるのです。このみ教えを学ばず知らない者は仏の弟子ではない」とお示しになり、「八大人覚を自ら実践する者は、その功德により必ず安らぎに至り、これを他の者に伝えるものは、お釈迦さまと等しくて違いはないのです」と仰っております。永平寺の修行僧もまた、八大人覚を浄書し、お釈迦さま、道元禅師さまのみ教えを学び、修行に励んでおります。

ご本山だより



## 大本山總持寺



### 秋季彼岸と両祖忌りょうそき

九月の声を聞くと暑さも凌しのぎやすくなり、何となく落ち着いた  
雰ふん囲気になってまいります。

九月は秋のお彼岸の時節です。總持寺では、十九日から二十五  
日まで毎日午後一時から法話、二時から施食会法要が行われます。  
特に秋分の日(二十二日)は江川禪師が大導師をお勤めになられ、  
さしもの広い大祖堂だいそどうも大勢の参詣者でいっぱいになります。

また、二十九日は「両祖忌」です。總持寺を開かれた瑩山禪師  
は總持寺の後席を峨山禪師に委ねられて永光寺えいこうじに移られた後、正  
中二年(一三二五)の旧曆(太陰曆)八月十五日、中秋の名月が  
冴さえわたる夜半に御入滅なされました。

宗門では明治十年(一八七七)に祖師忌の改正があり、太陽曆  
換算で奇しくも道元禪師と瑩山禪師のご命日が九月二十九日と定  
められ、「両祖忌」と呼ぶようになりました。

現在、永平寺では九月二十三日から一週間、「高祖大師御征忌こうそだいいしごしょうき  
法要」が修されております。

總持寺では、峨山禪師のご命日や能登祖院の御征忌日程ごしょうきも勘案  
し、現在は「御両尊御征忌会」として十月十二日から十五日の御  
正当まで法要が勤められております。